

回復への軌跡 上

協和町で四月、薬物依存の回復に取り組み民間施設「秋田タルク」が発足した。タルクの活動や、入所者の家族が抱えてきた困難、薬物に対する若者の意識などを追った。

秋田市医師会立秋田高等看護学院で六月二十六日、看護について考える行事「ナイチンゲール祭」が開かれ、「秋田タルク」のメンバー三人による講演会が開かれた。同学院の二年生が企画したもので、当日は一三三年生三十九人が参加した。

「中学生の時、先輩にシナーを吸うように誘われた。先輩が怖くて一緒に吸った」。講演会で、男性

（20）は薬物に手を出すようになったきっかけをこう切り出した。高校入学後、今度は友人から

依存症

「口では表現できないくらい、良かった。すぐに覺せい剤を勧められ、使用してみた。

「病氣」

量、回数が増え、気がつくときスリに支配される生活に陥っていた。クスリを賣うお金のため自販機を壊すなど、何でもやった」と当時を振り返る。十八歳の時に逮捕され、家庭裁判所に送致された。約二年前、茨城タルクの門をたたき、秋田タルクの誕生と同時に秋田に移った。

仲間と共有

同じ苦しみの

自覚、更生への一歩

ツフを含め、みな薬物経験者。秋田タルクでは、同じ苦しみを味わった仲間八人が入所している。この男性は「初めは、タルクで自分が病氣だと言われても納得できなかった。だから最初ころは、同じ入所者の人



薬物依存からの自立
—タルクからのメッセージ—

秋田市の看護学院で開タルクのメンバーによる

談・援助の手引き」を作成、地域の民生委員や養護教諭、保護司らに配布した。

身まわりのことができず、日常生活が破たんして苦しみを味わった仲間八人が入所している。この男性は「初めは、タルクで自分が病氣だと言われても納得できなかった。だから最初ころは、同じ入所者の人

たちを仲間として受け入れられなかった」という。しかし、実際は洗濯など

「一度」のつもりがやめられなくなる依存症は、病氣だということをわかってほしい」と訴えた。

【タルク(DARC)】薬物依存からの回復に取り組む民間施設。全国に二十六か所あり、約四百人が入所。茨城県結城市では一九九一年、茨城タルク(岩井喜代仁代表)が誕生。茨城タルクでは警備タルク(福島)、鹿島タルク(茨城)、秋田タルクを

講演会の最後に、生徒の代表者は「薬物依存は、病氣であると認識しなければいけないと感じた」と感想を述べた。

センターなどの支援を受ける一方、一日二、三回の「ミーティング」(グループセラピー)に原則九か月間取り組み、依存症回復を目指す。

「薬物乱用・薬物依存 相

平原さんは「フラッシュバック(突然、薬物を使っていた時と同じ状態に戻る一種の後遺症)の危険性がないとは言いつけない」とした上で、「事件を起す薬物依存者は、回復への取り組みをしていない人たち。タルクの歴史の中で、トラブルを起こしたことはない」と取り組みへの理解を訴える。

回復への軌跡

—中—

「長男を殺して私も死のうと考えていた」。シンナー中毒の長男(32)を抱えていた母親(秋田市)は、追いつめられようやくダルクに、たどりの着いた。四年前を振り返った。

長男の中毒は、アルバイト先から「休みがちで様子が変わり」と連絡を受け、発覚した。二十歳の時だ。大学を中退し、職を転々としたが、いずれも長続きしなかった。二十三歳になると、自宅での物を振り回し暴れるようになった。それまでは世間体を考え、母親と祖母が息子を立ち直らせようとしたが、身の危険を感じて精神病院に入院させた。

この時、長男のおじが東京のダルクへ連絡したが、ダルク側から「来た」という本人の意思がないと受け入れていない」と言われた。

家族過干渉 立ち直りの障害

患者本人に

日常の責任

万策が尽きた「底尽き」状態になり、第三者に任せられないと決断。息子も提案を受け入れた。

長男は、茨城ダルク・今日一日ハウス(岩井喜代仁代表)に入所。回復プログラムに取り組んだが三か月で脱走、実家に戻ってきた。同年七月初旬に再び茨城ダルクへ戻り、九か月間通じた。シンナーを必要としない「クリーンな生活」を



家族は子どもを抱え込み、ダルクや病院への相談が遅れることで事態は悪化する(協和町に誕生した「秋田ダルク」で)

また、シンナーやめてほしいに、親が子どもの隠探しをしたり、物を買ひ与えるのは論外とされている。

結局、長男は窓から中に入り一週間、自宅にいた。三日目に飲酒後、シンナーを吸った。ダルクでは一度薬物を使うと、再び原則として九か月間の回復プログラムに「一から取り組まなければならぬ」。長男は昨年四月、九州ダルクで再スタートを切った。

送れるようになったため、仙台ダルク(仙台市)で入所者の断薬を支えるスタッフとして働き始めた。

だが、知人の女性との関係がこじれ、実家に戻ることになった。本人からの電話で事態を知った家族は、倒を見ず「突き放す」ことが不可欠」と教えていたからだ。

今年三月末、長男は自立を目指してアルバイトを始め、六月にダルクを出たという。その直後に「二日間、野宿をした。今、仕事を探している。いろいろな荷物は着払いで実家に送った」と電話があった。以降、連絡はない。

今回の挑戦を母親は「本人が決めたことだから、それでいいと思ってる」と話す。最近、十年以上遠のいていた趣味の山歩きを始めた。「共依存」から抜け出つつある母親の穏やかな表情がそこにあった。

【家族の病】青少年の薬物問題は多くの家族の場合、本人を見張ったり、薬を見つければ内証で処分するなどの行動をとるため、子どもに振り回され、事態はエスカレートしていく。この状況は、家族も本人も巻き込まれている状態と考えられ、薬物使用を助長することになる。このため薬物依存症は「家族の病」と呼ばれる。家族は、患者が起した問題のしりぬぐいをせず、問題を直視させることが重要。「薬物乱用・薬物依存 相談・援助の手引き」(東京都南多摩保健所)編)から

薬物依存症は「家族の病」とも言われ、患者と、家族の間に築かれた「共依存」の関係が回復の障害と考えられている。日常の責任は患者本人に負わせ、家族は干渉しないことが必要だ。

ダルク

後、再びシンナーへの依存がエスカレートした。ある朝、長男は出勤後、病院を抜け出した。シンナーを吸いながら車を走らせ、昭和町でカーブを曲がりきれず水田に転落した。この時、精神科医から長期入院を勧められた。しかし、「シンナーを吸っていない時は、昔と変わらない。納得できない」と母親は一九九八年三月、ダルクへ入所することを長男に勧めた。

回復への軌跡 一

県精神保健福祉センター(協和町、飯島寿佐美所長)は昨年十二月、県内の三高校(秋田東、西仙北、角館)とタイアップして、薬物依存症からの回復を目指す民間施設「茨城ダルク」グループ代表の岩井喜代仁さん(55)を招き、薬物問題に関する講演会を開いた。

岩井さんは、中学校や高校、看護専門学校など千校を超す全国の学校で講演を開催。薬物依存症だった自らの過去、ダルクの現在の取り組みを野太く大きな声で語り続けている。若者に必ず訴えるのは、薬物依存症は自分一人の意志では回復できない病

教育

気であることや、薬物を使えば幻聴・幻覚などに陥

り、自分の体で責任をとらなければならなくなる」と、親や友人などすべてを失うことだ。

その上で、「グスリ仲間」と深みにはまることを防ぐために友人をたぐさんつくることが、薬物を使っていることや、薬物を使っている友人を見つけたら注意をせずに、その友人に近づかず逃げることを強調する。意外な忠告とも感じられるが、これは使用している側から逆に勧められる可能性がある高いことや、攻撃を受ける危険性があるため、薬物問題への対応の難しさを物語っている。

同センターでは調査研

中高生らに薬物の怖さ訴え

汚染、抑止に力

ダルク、自治体

究事業として、生徒らに「対し薬物に関する匿名アンケートを講演の前後に実施した。対象生徒は計約千二百人で、回収率は講演前94・3%、講演後99・5%。

この中で同センターが注目したのは、講演前後のアンケートに共通した「あなたは、友人に薬物を勧められたら断る自信がありますか」という質問。回答は、

①絶対ある②まあある③あまりない④全くないの選択式で、講演前は①が絶対ある」が87・9%だったのが、講演後は71・9%に減少していた。

この結果について、同センターの柴田英文副幹事は「薬物問題は自分とはあまり関係ないと考えていた生徒たちが、講演を聴いた結果、自分の身近にある現実的な問題としてとらえらざるを得なかった」と話している。

同センターでは今後、生徒のフォロー体制を整えるため、二〇〇〇年度から同センターで行っている匿名可能な薬物相談窓口や、二か月に一回、秋田市で実施している医師による相談(要予約)のPRなどを図りたいとしている。ダルクの学校講演活動なども支援



薬物依存症から回復するための心構えを話す岩井さん(仙台ダルク家族会で)

していく方針だ。

秋田ダルクでは一日に一回、入所者が一人ずつ薬

【シンナーの害】シンナーは、塗料などを薄めて粘度を下げるために使用される混合溶剤の総称。気化したシンナーを吸入すると中枢神経が抑制され、酒に酔ったような感じになる。一度に大量に吸入した場合、呼吸中枢がまひし窒息死することもある。乱用を続けると幻覚・妄想などの精神障害が現れる。特に恐ろしいのは脳の委縮で、一度破壊された脳は、乱用をやめても、もとに戻らない。

―東京都南多摩保健所編「薬物乱用・薬物依存 相談・援助の手引き」―より

る友人を見つけたら注意をせずに、その友人に近づかず逃げることを強調する。意外な忠告とも感じられるが、これは使用している側から逆に勧められる可能性がある高いことや、攻撃を受ける危険性があるため、薬物問題への対応の難しさを物語っている。

同センターでは調査研

る「ミーティング」(グループセラピー)を行っている。秋田市添川にある教会は、このミーティング場

所として毎週日曜日、敷担当しました)

地内の離れを貸している。教会のシスターは、「薬物問題は切実な問題。心の平安を保つ場所として役立ててもらえれば」と話す。県内でも、回復への取り組みに対する理解が芽生え始めている。

(この企画は山井健史が

